

フランス国立東洋言語文化大教授 **クリストフ・マルケさん****大津絵にもう一度光を**

フランスの日本美術史研究者が大津絵の歴史と魅力に迫った文庫本が人気を集め、増刷されている。著者は「大津絵は、江戸時代の庶民の暮らしや、もの考え方を垣間見ることができ文化財。多くの人に親しんでほしい」と話す。

著者はフランス国立東洋言語文化大学教授のクリストフ・マルケさん(52)で、本のタイトルは「大津絵 民衆的諷刺の世界」。江戸時代の初めから明治時代に、東海道の土産物として知られた大津

絵の歴史をひもとき、大正時代に大津絵を研究した篆刻家・楠瀬日年が描いた78種類の画題をカラーで収録している。

マルケさんは、高校時代に川端康成や谷崎潤一郎らの作品を通じて、日本人の美意識に触れ、大学で日本美術史の研究の道へ。正岡子規の随筆に導かれて大津絵と出会ったという。「調べていくうちにどんどんハマってしまった」と振り返る。調査のために大津にも何度も足を運んだ。

マルケさんによると、大津絵は、江戸時代には浮世絵と並ぶ人気を誇ったという。初めは仏画が中心だったが、次第に人間のおごりや愚かさへの風刺などを盛り込んだ戯画や教訓絵に。やがて、120ほどあったという画題が「鬼の念仏」や「藤娘」など10種類に絞られ、庶民のお守りとして親しまれた。

大津絵の魅力の一つは、大胆な線と洗練された色彩が生み出す素朴な味わいだ。現代の「ゆるキャラ」にも通じる愛

歴史と魅力記した文庫本 人気

らしいキャラクターは、浅井忠や梅原龍三郎、ピカソや岡本太郎ら、多くの芸術家を魅了した。正岡子規は、大津絵について「幼稚なる画法に却って写生の真面目を存せり」と指摘し、民芸運動を唱えた柳宗悦は、その画面の中に、民衆の機知と社会批評の存在を読み取った。

ただ、無名の職人たちが、客の目の前で素早く仕上げるなどの特徴を持つため、芸術作品としては残りにくく、現存するのは数百枚ほど。浮世絵に比べて「ほとんど忘れられた存在になっていた」(マルケさん)という。

大津絵にもう一度、光を当てたい――。マルケさんは、一昨年にフランスで刊行した入門書にも、その日本語版で昨夏に刊行した今回の文庫本にも、そんな思いを込めたという。

昨年まで5年間、東京にある日仏会館・フランス国立日本研究センターの所長を務め、帰国前に大津市の「びわ湖大津PR大使」にも任命された。現在は、パリにある大学を拠点に大津絵や大津のまちの魅力の発信に取り組んでいる。

今後の目標は、フランスで大津絵の展覧会を開くことだ。職人たちが、伸びやかで生き生きとした絵に込めた心と、人間や社会へのまなざしを多くの人に感じてほしい、という。

「大津絵 民衆的諷刺の世界」(角川ソフィア文庫)は1冊1512円(税込)で販売中。(八百板一平)